

① ウォン・テヨン 著 蓮池薫 訳

『悲しみよりもっと悲しい物語』

(金の星社)

私が今回ご紹介したい作品は韓国の純愛ラブストーリーです。結末は韓流作品特有の最後は主人公が死んでしまうというよくあるものなのですが、構成がとても工夫されています。登場人物4人のそれぞれの視点から4つの物語が作られていますので、推理小説を読んでいるような感覚を覚えます。著者が韓国を代表する詩人なので、とても美しい文章で仕上げられていますし、訳もあの有名な蓮池薫氏です。あまりの悲恋にきっと涙が止まらないでしょう。

929.13||Won (N.K.)

③ 天野 尚 著

『最後のアマゾン：天野尚写真集 =  
The last Amazon : Takashi Amano  
photobook』

(小学館)

南米のブラジルを中心に、ボリビア、ペルー、エクアドル、コロンビア、ベネズエラ、ガイアナなどにまたがって存在する熱帯雨林地域、アマゾン。そのアマゾンは、地球の大気中の酸素の3分の1を生み出すと言われていています。本書は、アマゾンの豊かな自然、そしてそこに暮らす人々や動物などの数々の美しい写真によって、アマゾンの魅力を余すところなく伝えていています。しかし近年このアマゾンの熱帯雨林の木が切り開かれて、貴重な生態系が失われつつあります。地球最後の楽園と謳われているアマゾンを存続させるために、私たちが何をすべきかを強く問いかけている1冊です。

296.2||Ama (S. S.)



② 竹原義郎 著

『ほんものの京都企業：  
なぜ何百年も愛され続けるのか』

(PHP研究所)

本書は創業100年以上の長きに亘って京都に根付いている7社を紹介しています。この長い期間は決して平穏に過ぎ去った訳ではなく、様々な苦難を乗り越えて現在に至っているという事がよく分かります。「存在価値」「存続価値」という視点から、本書の副タイトルになっている「なぜ何百年も愛され続けるのか」について迫ります。7社の業種は異なっていますが、共通しているのは理念（或いは信念）が存在しているという点です。それを基にして、経営者はどの様な判断をして来たのか。企業をこの様な角度から見つめてみてはいかがでしょうか。

335.2162||Tak (T.F.)

④ 関田淳子 著

『モーツァルトの食卓』

(朝日新聞出版)

本書では、35歳という短命に終わった天才モーツァルトの食生活を通して18世紀ヨーロッパの食文化がどのようなものであったか解りやすく説明されています。モーツァルトは、その生涯の約3分の1を旅に明け暮れ、旅先で出会った様々な食材と料理のことを彼と彼の父親は手紙に詳しく書き記しています。少年時代は旅先の安い総菜屋や修道院の施しのスープで空腹を満たし、成人してからは、家庭料理を食べる機会が余りなかったモーツァルト。貴族の食卓や宮廷の超高級料理に接しながら、幼いうちはそれを批判的な目でみていたという、ただ単なるグルメ紹介本とは違った面白さがあります。

762.346||Sek (F.O.)